

山村調査、海村調査における葬制の位置づけとその目的

Research Notes

山田 慎也

一 はじめに

民俗学において、ひとの死をめぐるさまざまな儀礼や習俗、つまり葬制^①については、大きな関心が払われ、重要な研究課題と認識されることで、その成果の蓄積も膨大である。葬制研究は死の習俗を通して死の観念や社会との連関またその変容などの課題をもつだけでなく、ひとの一生にかかわる他のさまざまな習俗との関係を含め、人生儀礼、通過儀礼のなかに位置づけられて捉えられることも多い。

だが、現在のような形で、葬制が人生儀礼ないし通過儀礼の一環として位置づけられ、また個別の課題として確立していくには、民俗学が成立していく過程において当初から所与として意図されていたかについては、必ずしも明確ではない。

とくに民俗学確立期といわれる一九三〇年代、柳田国男を中心として民俗学研究者が組織的に行った初の全国調査である、いわゆる山村調査とその後の海村調査においては、葬制に関する調査項目の内容とその連関については大きな相違がある。なかでも山村調査の三年間の過程においても質問項目に変化が生じている。

そこで本稿では、葬制に関する山村調査と海村調査の項目を分析し、さらに三ヶ年の調査期間においても毎年項目に変化のあった山村調査については、調査にあたった民俗学研究者の採集手帳の内容をも含めてみていくことで、民俗学の成立期における調査対象とその位置づけについて検討し、現代の研究課題に至るプロセスを考察していきたい。

二 課題としての葬制とその位置づけ

民俗調査の方法については、特定の調査目的があつて項目を作ることになるが、多くの村落調査では、民俗全般の調査が行われる。こうしたなかで一般的な調査項目として捉えることのできるものが、『民俗調査ハンドブック』（上野他編 一九七四）とその新版（上野他編 一九八七）である。これは書名の通り民俗調査についてのさまざまな目的や技術、内容、留意点などを扱った入門ハンドブックである。

そのなかでは「民俗調査質問文例集」があり、前文では「ここに掲げた文例集はあくまでも自分の調査項目や質問文集を作成するさいの一つの参考として記したものである。したがってこの文例集に含まれた内容だけが民俗調査の内容なのではないし、これだけのことを聞けば調査は

完了ということではない。調査地の条件と自己の問題意識に基づいて独自の調査質問文集を作成するのが望ましい」としているが〔上野他編一九八七 二二九〕、研究者も入門者も身近に触れることが出来る点でもっとも標準的な調査項目であり、一般的な民俗調査の調査項目として捉えることができる。

『民俗調査ハンドブック』新版では、1村落組織、2家族と親族、3生業、4衣食住、5人生儀礼、6信仰伝承、7年中行事、8芸能・競技、9口承文芸、10都市の民俗としている。そのなかで人生儀礼は以下のよう構成になっている。

5 人生儀礼

〈1〉産育

(イ) 妊娠 (ロ) 出産 (ハ) 子供の成長と祝い (ニ) 厄年と年祝い

〈2〉婚礼

(イ) 相手の決定 (ロ) 縁談の成立 (ハ) 結婚式 (ニ) 婚礼以降

〈3〉葬制

(イ) 葬式 (ロ) 死後の供養 (ハ) 先祖祭祀 (ニ) 墓制

以上を見ると大きな項目として、「人生儀礼」となっており、その下位分類として「産育」、「婚礼」、「葬制」と分かれ、さらにその下位に葬制は「葬式」が一六項目、「死後の供養」九項目、「先祖祭祀」六項目、「墓制」六項目の質問項目があり、人生の過程の習俗が時系列に提示されている〔上野他編 一九八七 二四七～二五二〕。ただし『民俗調査ハンドブック』初版では、ハの先祖祭祀がなく、葬式、死後の供養、墓制となっている〔上野他編 一九七四 二二三～二二七〕⁽³⁾。

このような人生儀礼と葬制の関係は、文化庁編集の『民俗資料調査収集の手びき』〔文化庁編 一九六五〕においてもほぼ同様である。「民俗資料の分類」一一項目の中で、9、人の一生（通過儀礼）となっており、そのなかは(1) 妊娠・出産、(2) 生児儀礼、(3) 育児、(4) 七五三・成人式、

(5) 婚礼、(6) 婚姻、(7) 厄年・年祝い、(8) 死・喪、(9) 葬送、(10) 忌明け・年祭、(11) 葬制・墓制、(12) その他、となっており、やはり人生の過程のなかに位置づけられ、葬制自体も、魂呼び、末期の水や枕飯、耳塞ぎ餅だけではなく、通夜や香典、納棺、野辺送り、土葬、火葬と、葬儀全般に関わっている〔文化庁編 一九六五 三七～三九〕。また、寺の役割や葬法、異常死者の葬送なども含み〔文化庁編 一九六五 三八〕、仏教的な要素も意識しながら葬制全体を網羅する形になっている。

こうした質問項目に関する著書は限られており、そのなかでもっとも体系的でありいち早くまとめられたものが、柳田国男・関敬吾編の『日本民俗学入門』〔柳田・関編 一九四二〕である。ここでは、一住居、二衣服とはじまり二七兆・占・禁・呪、二八医療でおわる二八項目にわたり、中程で、一大家族、一二婚姻、一三誕生、一四葬制、一五年中行事と分かれている。これは柳田国男の民俗学の方法論である三部分類、第一部の目に映ずる資料、第二部の耳に聞こえる言語資料、第三部の心意感覚に応じて分類したものであり〔柳田 一九八〇 一一九～一二四〕、後に関敬吾は新版刊行の際には三部分類に従って目次を分けている〔柳田・関編 一九八二 viii～x〕。ここでは家族からのつながりで婚姻が登場し、人生儀礼との関連性によって誕生、葬制となり、儀礼に共通して年中行事につながっていく。また葬制の質問項目も「一、人の凶事を一般に何というか。」と葬の名称を問うことから始まり、一四〇番目の死後の生まれ変わりや祖霊化の質問で終わり、一四〇項目と数が多い〔柳田・関編 一九八二 二三六～二五三〕。こうしてみるとほぼ一九四二年の『日本民俗学入門』段階ではすでに葬制は、ひとつの大きな研究課題であり広範な質問項目を持つ分野として、また誕生や婚姻と関連する形で位置づけられていることがわかる。

三 山村研究での葬制の位置づけ

それでは民俗学史上、初の本格的な総合民俗調査である山村調査では、葬制はどのように位置づけられていたのでしょうか。山村調査は、正確には「日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査並に其の結果の出版」という題目で柳田国男を代表者とする文部省の科学研究費補助金によって行われた研究であった⁽⁵⁾。

民俗学の確立期について、もっとも有力な考え方は一九三〇年代前半とされており〔福田 一九八四 一〕、一九三四年の『民間伝承論』、一九三五年の『国史と民俗学』、『郷土生活の研究法』など、民俗学の対象と方法を示す理論書がこのとき集中的に刊行されている。また柳田の『民間伝承論』のもととなった講義が、一九三三年九月一日の木曜日から自邸で始まり、これが木曜会の発端であった。さらに一九三五年七月から、柳田の還暦を記念して、「日本民俗学講習会」が全国の民俗学研究者を集めて日本青年館で行われ、この会の途中で民間伝承の会、つまり後の日本民俗学会が誕生することとなった〔岩田 一九九八 二五六―二五七〕。

こうした状況の下で体系的な調査として、この山村調査が行われることとなった。山村調査では、『郷土生活研究採集手帖』という調査ノートを作成し、柳田の元に組織された郷土生活研究所の同人が調査を行った。その項目は一〇〇項目にわたり、項目の作成と調査地の選定は柳田が行った。調査項目の改訂は当初から想定されており、調査員も加わって毎年増補改訂していった〔成城大学民俗学研究所編 一九九〇 三四〇―三四四〕。ちなみに項目の変化の全体については、福田アジオが『山村海村民俗の研究』の「解説」においてその概要を示しており〔福田 一九八四 九―一九〕、その増補改訂は大幅に行われていて、その中に葬制も含まれるのであった。それでは、葬制を中心にそれぞれの年の採集

手帖をみていきたい。

① 昭和九年（一九三四）の採集手帖

三年間の山村調査に用いられた『郷土生活研究採集手帖』は、昭和九年の採集手帳の質問項目が基本となっている。この質問項目は当時柳田が百項目をとという区切りのいい数で選んだという〔成城大学民俗学研究所編 一九九〇 三四六〕。一番を「村（部落）」の起りについて何か言ひ伝えがありますか」と村の起源についての質問からはじまる。つぎに村の暮らしや外部との交流、村での社会組織や交際、食生活や衣服と続く。四八から家の構造の質問となり、まず四八が囲炉裏での主婦の座席からはじまり、デイの使い方、五一が花嫁の入口、五二が正月の門松、五三が盆の仏迎えと、五三から五八まで葬制に関連する項目が続いている。そこで具体的な質問項目を見てみると以下のようになっている。

- 五三 盆に仏様を迎えて来るのはどの口からですか。
- 五四 葬式の時棺をどの口から出しますか。
- 五五 盆の仏迎へは埋めた場所へ行きますか、寺へ行きますか。
- 五六 年回をつとめるのは何年忌が最終ですか。其時に墓はどうしますか。

五七 それから以後はどういう風にして祭りますか。

五八 先祖の祭りやうが足らぬということを心づく場合がありますか

○ミコの口から、夢によって、又は其他の知らせなど。

こうしてみると、前の質問とのつながりは、家の構造と出入口の質問であり、五一は結婚式における花嫁の入口であり、五二が大きな門松をたてる入口の場所であることから、非日常の儀礼における家の出入口の質問から葬制に関連する質問に続いていく。ただしその質問の目的はあくまでも家の出入口であり、五三の盆の迎えも、五四の出棺の出口も家

の構造における視点からの関心であり、葬制そのものの質問とはなっていない。そして次には、先祖に関する習俗や観念に関する質問項目にすぐ移ってしまい、五五の盆の仏迎えの場が墓地か寺院か、五六が年忌と弔い上げのことであり、五七が弔い上げ以後の先祖祭りであり、五八が先祖に関する観念になり、以後の作物禁忌や氏神祭祀など神観念や俗信に移っていく。

つまり、質問は衣食住といった、第一部の「目に映ずる資料」から、第三部の「心意感覚」へと柳田のいう三分類に対応しており〔岩田 一九九八 二五六―二五七〕、衣食住の住に関連する出入口という家の構造から、家の重要な構成員でもあり、精神的支柱となっている先祖の祖霊化の過程とそこから抽出される先祖観、氏神といった神観念へと、この質問項目は続いていくこととなる。こうしてみると臨終から埋葬、忌明けまでの葬制、とくに儀礼や習俗に関して問う意図の質問は、山村調査の計画当初にはないことがうかがえる。

② 昭和一〇年（一九三五）の採集手帖

ところが、翌一九三五年の『採集手帖』になると質問項目に変化が起きる。項目の数自体は一〇〇項目で変わらないものの、それぞれの質問の入れ替わりや合併、挿入が起きている。それでは内容的に葬制に関連する質問は以下の通りである。

五一 葬式及び忌中に関して特に変わった行事はありませんか。

五二 葬式の時棺はどの口から入りますか。

五三 盆に仏様を迎えて来るのはどの口からですか。

五四 盆の仏迎へは埋めた所へ行きますか、寺へ行きますか。

五五 年回をとめるのは何年忌が最終ですか。

其時に墓はどうしますか。

それから以後はどういう風にして祭りますか。

五六 先祖の祭りやうが足らぬということを心づく場合がありますか。

○ミコの口から、夢によって、又は其他の知らせなど。

まず前の項目からのつながりを見ると、四九に嫁の入口、五〇に正月の門松は同じであり、家の構造から葬制関連の質問にはいるのは昭和九年の採集手帖と同じであるが、前年度までなかった、五一の葬式及び忌中の行事に関する質問が新たに挿入されている。これはまったく新しい質問項目であり、それまでのつながりである家の構造とは直接には結びつかないものである。

そして続くのは、五二の葬式の時の棺の出口と五三盆のお迎え口であり、昭和九年の採集手帖の質問と同様である。しかし五五になると年忌と弔い上げの質問のなかに、前年度は五七として単独の項目であった弔い上げ以降の先祖祭祀の項目が下位項目となっている。そして先祖に関する観念についての質問が続いているのであった。つまり、「特に変わった忌中の行事」として、主として忌中に関する葬儀習俗の質問が新規に加わったことがわかる。

じつはこうした葬制をはじめとする人生儀礼の調査項目の変化は、誕生に関しても同様の事態が起きている。昭和一〇年の手帖では、「七四、特に変わった産屋の行事がありますか。」と質問項目が加えられているが、昭和九年の段階では、産屋に関する質問、つまり出産に関する問いかけはない。

そのため、その質問の位置も上記の五一の葬制関係の質問以上に脈絡がなく、七三は最も信仰を集める神仏についてであり、七五は病氣平癒の祈祷の参拝先の質問の間に挿入されることとなり、神仏信仰のなかに産屋についての質問と落ち着きの悪い位置となっている。これも産屋という産育についての質問が昭和九年の採集手帖には特にないため、昭和一〇年の採集手帖においてこのような場に位置づけられたのであった。

③ 昭和二年(一九三六)の採集手帳

それでは最終年度である昭和十一年の採集手帖では、各項目全体にわたって統廃合がさらに進み、またそれぞれの項目の下位の質問文も附属し、また留意点も加わるなど、かなり詳細な質問項目となっている。そのなかで葬制に関する質問を見ていきたい。

六三 葬式の時棺はどの口からでしょうか。

○棺が家を出るとき物を破壊するとか、其の他特に変わった行事をしませんか。

○野辺送りから帰って来た人は村や家の入口に入る時どんな作法をするか承りたし。

六四 忌中の行事を承りたし。

○忌みにかかる人の食事を別にしますか。

○棺をかつぐ人、穴を掘る人はどんな人ですか。

忌みの晴れる順序は人によって相違がありますか。

六五 盆に仏様を迎へて来るのはどの口からですか。

○盆火はどこで焚きますか。

○精霊棚はどこにつくりますか。

六六 盆の仏迎へは埋めた所へ行きますか、寺へ行きますか。

▽埋めた墓と参る墓と別な場所はないか注意する。サンマイ、ラントウバ等墓地を意味する言葉は色々ある。それは埋めた墓か、参る墓か注意して見る。

○盆の仏迎へに河や海や山へ行くことはありませんか。

▽精霊様は何処から来ると信じているか聞いてみる。

六七 年回をつとめるのは何年忌が最終ですか。

其時に墓はどうしますか。

それから以後はどういう風にして祭りますか。

六八 先祖の祭りやうが足らぬということを心づく場合がありますか。

○ミコの口から、夢によって、又は其他の知らせなど。

▽先祖の祭りを最も丁寧にするのは血縁の者か家を継いだ者か。

▽家屋敷を買った人が売った人の先祖を受け継いで祀ると云う様なことはないか。

この昭和十一年の採集手帖では、まず▽記号で、質問項目そのものではなく調査に際しての留意点が加味されていることがこの年の手帖の大きな特徴である。そこでは毎年の調査による気づいたことが加えられている。

全体との連関については、六一が正月の門松の位置の質問、六二が花嫁の入口と、昭和九年、昭和一〇年の採集手帖とは、門松の位置と花嫁の入口が入れ替わっている。そして花嫁の入口の次に、六三として棺の出口になり、六四の忌中の行事となる。つまりここでも、昭和一〇年の採集手帖とは異なり、棺の出口と忌中の行事が入れ替わっている。

それは、項目間の連関として、正月行事を前に出し、花嫁の入口から、棺の出口として、婚姻、葬送と人生儀礼のつながりから、忌中の行事に繋がっていることがわかる。そしてそれ以後の項目は六五の盆のお迎え口、六六の盆のお迎え先、六七の最終年回、六八の先祖の祭りは、質問項目としては前年以前と同じ順番である。

さらに個々の質問の内容自体が、それぞれ独自性を持つものとして、それぞれ詳しくなっている。六三の棺の出口についても、出棺に関する一番目の小項目として、茶碗を割ったり、ガンモドシ的なものを期待しての質問であり、二番目の小項目は、出棺ではなく埋葬から帰ってきたときの野帰りの作法についての質問であり、出棺についての質問からさらに関連する習俗に関する質問に広がっている。

さらに六四の忌中の行事についても、一〇年の採集手帖には「特に変

わった行事はありませんか」と聞いているのに対し、一一年の採集手帖では、忌中の行事を承りたしと、特別な作法に限定せず、一般的な内容（調査者にとつても）を採集するような質問となっている。そして一番目の小項目は別火の習慣について、第二番目は忌みのかかる作業、棺担ぎ、墓穴掘りの担当者についての質問で、それをまとめる形で忌みの晴れる順序について聞いている。つまり、忌中の行事として忌中の具体的なあり方、また忌明けの問題についての質問となっている。

また盆のお迎え口も、単に家の入り口だけでなく、迎え火などの盆火の焚く場所、精霊棚の位置など、死者を迎える作法の多様性についての質問に拡大されている。さらに六六では、盆の仏迎えの場所についての質問で、質問の留意点として、いわゆる両墓制の有無について注意することとなっている。これは柳田の「葬制の沿革について」で指摘された「葬地」と「祭地」とした二種類の墓地を、大間知篤三が「両墓制」と呼び『山村生活調査第二回報告書』で「両墓制の資料」として報告しているように（大間知 一九八四（一九三六）、「両墓制」という研究課題の発見でもあった（福田 一九八四 一八―一九）。

四 報告された採集手帖

上記のように、年々の質問項目が積極的に変わっていくのは、毎年の調査によって得られたデータについて柳田を中心に報告議論していくなかで、次の調査に反映させるために、質問項目を積極的に変更していったからである。そこでその報告のもととなった、柳田に提出された当時の採集手帖が、柳田文庫として現在、成城大学民俗学研究所に保存されている。採集手帖を見ると、きれいに整理されているものが多い。関敬吾によると、調査では別にノートを作って、採集手帖には清書をして提出したといひ（成城民俗学研究所編 一九八四 三四六）、調査後に情報が取捨選択されている可能性がある点には留意する必要がある。

① 昭和九年の調査

この年行われた採集手帖を見ると、多くの調査者はそれぞれ質問項目を満たすのみであったが、なかには関連する情報を加えて記入しているものもあった。山形県最上郡安楽城村を調査した山口貞夫は、五四の棺の出口についての質問の答えとして、「国を返さぬと入って座敷から直ちにだす。」の後、「三日目に出すのが普通。友引の日なるときは二日目。棺を出すまで通夜をする。耳塞餅ということあり。同年者の死を聞くと餅をつき耳に当ててから河へ流す。自分の村より川上のもものだけに就いてよくすると。午前中に出棺すると魔に合うとて多く夕刻。」と友引などの葬儀を忌む日、また同様の忌避である耳塞ぎ餅についても記述している。

このような形式で千葉県君津郡亀山村を調査した瀬川清子の手帖には、棺の出口の他、葬式組である「地名（ジミヨウ）」とその作業、三枚芝を積む埋葬の慣習などの情報が添えられている。長野県更級郡信濃村の守随一の場合には、棺の出口の他、湯灌と納棺、葬列の役付け（役よび）とその順序、墓での儀礼についても記載されている。高知県高岡郡檜原村の橋浦泰雄の報告も、棺の出口の他、出棺の時の儀礼や埋葬から帰ってきたときの作法、行列の習俗など、さまざまな民俗データを付加している。

こうした付加的な情報は、質問の回答となっていないことから、山梨県東八代郡中蘆川村を調査した金城朝永は、棺の出口の回答として「大戸を外して出す」と記したあと、「参考」と添え書きして「身内の者には「四十九餅」を配り、客には昆布、油揚げ、ひじき等を振る舞う」などと記載している。

こうしたなかで、茨城県茨城県多賀郡高岡村を調査した大間知篤三と和歌山県日高郡上山路村を調査した倉田一郎の採集手帖は、棺の出口の部分に、詳細に葬制について記述している。特に大間知篤三は他の項

目でも同様であるが、それに関連する事項を簡条書きにしておかなり詳しく大量に記述している。その内容の広がりには以下の通りである。

五四 葬式の時棺をどの口から出しますか。

- ・みな座敷の表口
- ・ドツタリが出る。^(ツ)シキヤクは従兄弟の子位までへ行く。
- ・猫につかれぬため、土間を掃く箒を死人の上へ載せる。古いものでもかまわぬ。
- ・ホトケマブリ 通夜
- ・トリシマイ 自家の葬儀の場合使う。「幾日トリシマイだ」とかいふ。シウトシマイ舅姑の葬儀。
- ・棺は近頃ネセ棺。古くはタテ棺。
- ・死人の足袋へ六厘入れ、草鞋をはかず。ウツギ杖。生き人間はウツギ杖を持たず。
- ・ミミフサギモチ。同性同年齢の知人の死を聞くとフクデ二つ耳へ当てて河へ流す。自分の死を逃れるためだという。正月十四日ウラ餅をついて直ぐ二つ丸め耳へあてて「良いこと聞け聞け」という風大能にもあり。
- ・妊婦が火災を見ると子に赤アザ。死人を見ると黒アザが出来るという。懷中にカネの鏡を入れて会うとそうならぬという。
- ・家の前庭に青竹二本を立て、シャボー（ジャンボー）は三回まわって出発す。
- ・ザルコロバシ。メカイコロガシ。出棺直後棺を置いてあった場所から縁先までころがして箒で掃く。仏が帰らぬという。
- ・四十九の餅。葬儀当日寺へ。三升で作る。平常三升餅を作ることを忌む。亡者が針の山を超す時足の裏へつけるのだという。
- ・キリミゼン。横向膳。中戸川に十月二十日のエビスコーにこれで供え

る家あり。

・ヒニマジル、ブクニマジル。不幸の家で飲食すると七日間は「ブクだから宮にいけぬ」

・七日目がヒアキ。不幸の家では五十日間忌み、神社へ行けぬ。但し家の荒神様は忌みに一寸も関係なく、毎朝水をあげる。台所の戸棚の中や大黒柱に祀つてある。神体の全然ない場合も多い。

・祝いの時は勿論、不幸にも赤飯は作る。但し不幸の時は赤飯は一杯であとは白い飯。

・八十才以上にもなつて死んだ時は、むしろ祝いに近くマキモチでする。

・二才までの嬰兒が死ぬと付近の女性だけで悔やみをして床下に埋める。

・棺担ぎ四人。穴を掘る。坪内輪番。親戚は免れる。女房妊娠していれば免れる。子供が十二ヶ月腹にいるという。死んだ馬（ソマ）も担がせない。むかしはその札に足袋一足であった。近頃は反物一反、それを肩において棺を担ぐ。幡旗もそれにやる。

・田植の夢を見ると二三日中に死人の通知を受ける。

・ジゴクノカネツキ。ツーン、カーンと鳴き合う。松岡村ではこれが鳴くと死人が出るという。

・不幸の時の団子だけは一つ宛丸める。不幸の時のオカチンは草鞋と下駄。片方宛でつく。

・五月中に田植えをすると仏様の食べ物になる（死人が出る）（？）

・ウネハズシ。一部分種子を播き忘れること。食わぬ人が出る。見つけると直ぐ播き加える。

・フジクに仕事をすると食べない人が出る。正月は子の日、二月は午の日。三月は酉の日、四月は子の日、五月は午の日、六月は酉……

・昔は家に死人があると年内機は織らなかつた。機の先の糸を巻いてある木をマネギといい、死人を招き返すからだという。

以上が棺の出口に対する大間知の記述である。その内容は、葬儀の通知から、通夜、埋葬、異常死者、葬儀の俗信など臨終から死後の供養まで葬制に関するさまざまな内容が記載され、調査のフィールドノートとしては十分なデータであり、その調査技量がうかがえる手帖である。同様に倉田一郎も以下のようなノートになっている。

五四 葬式の時棺をどの口から出しますか。

・人死ねば、近所、親戚、大工など集まり、柩（ガン）を作り診断書をと、死亡届、寺への式日の通知、アナホリ（イケホリ）などする。遠方への通知は、昼なら一人、夜の山越えなら二、三人のヒキヤク※。死人は小枕、マクラヤノメシを供え、刃物をマヨケとしてフトンの上へ載せる。（アクマハライとか）。死人の着物は白木綿のテサシ、キャハン、ズダ袋、スミズキン、キモノ（無襟、糸の端を結ばず）など女が縫う。ロクドーセンとて、一厘銭六枚をズダ袋へ。お通夜、念仏。翌朝納棺。仏間で湯灌。棺に藁をしき前述の着物などをさせる。ヨメ、兄弟の役。死人の子は松明かろうそくをあかして入棺をたすける。死人の子、又は未亡人が鋏で爪を切り、棺の中へ、蓋の上にガンガサを載せ、仏前に安置。納棺をシタンメという。神封じを、高神の小祠へ、他人の手で白紙の封をかける。ガンモドシとてかねての立願を解くため、白半紙に米、塩、□□、小□を包み、家のセドから表側へほりこえさす。これらは死んですぐやる。

・それから葬式。仏間で。和尚が読経前に剃刀を棺の方につきつけて香剃の型をやり読経。次に仏前又は庭前にて（墓前との□事あり）引導を渡す。和尚、家の主要道具（例えば鋏）を手にとって引導を渡すとそれを円を描くように動かし、喝（口に出る）！とか喝とかいい、棺の方になげつける。葬列は坊主と人頭に棺かつぎ（カルメとか）が棺を担いで。カルメとは、死者が男性老人とすれば、その娘の嫁ぎ先の

婿がやる。次に相続人が位牌を、未亡人が天蓋を棺の上へ差し掛け、相続人の妻がマクラヤノメシを持ち、死人の子らが年の順に四人だけ、仏諸行無常、法は生滅法、僧生滅滅已、宝寂滅為楽をそれぞれいた四本の幡をもち、死人の兄弟姉妹は灯籠（提灯とも言ふ）を二個もちゆく。次に三等親以上の人が木製鋏をもち、ソトバ、花立て、水桶など適宜の人が持ち、会葬者が後に続く。

・三日目をミツカノシアゲ、寺詣りと墓参。七日目をヒトナヌカ、十四日目をフタナヌカ、二十一日目をミナヌカ、四十九日目を尽七日忌。二十一日目まで家族のみの参り。四十九日目は濃い親戚をよび仏間で読経。墓前でも読経。

絵図 三段幕、マクラヤノメシ、ハタ、トロー、引導渡しの図
※丹生川では一人でヒキヤクに行くな二人でいけという。

倉田の場合にも、臨終から四十九日までの葬儀の過程の詳細な記述だけではなく、三段幕、マクラヤノメシ、ハタ、トロー、引導渡しの図などの絵図も書き添えられており、大間知同様、その調査の詳しいさまがうかがえる。

一方でこうした調査に対し、葬制研究にも大きな業績を残し、後には『詣り墓』（一九八〇、名著出版）『靈魂の行方』（一九八四、名著出版）などを刊行している最上孝敬は、長野県上伊那郡美和村と三重県飯南郡森村の調査をしているが、五四の棺の出口の質問に対しては、単純にその回答だけしか手帖には記載されていない。実際の調査ではそれだけでなく、採集手帖からは判断がつかないが、少なくとも昭和九年の調査段階では、棺の出口以上の情報を収集することは、調査を行っているメンバーの間では共有化されていないことがわかる。

② 昭和一〇年の調査

ところが翌一〇年の採集手帖には、質問項目として「五一 葬式及び忌中に関して特に変わった行事はありませんか」が挿入されていることにより、各人の調査は以下のように変わっている。まずほとんどの調査者が、この項目に回答を記していることである。そのなかで詳しく葬送儀礼、とくに忌みの習俗について記載されているものは以下の通りであった。

・相応にデータが記載されているもの

岩手県九戸郡山形村 大間知篤三

宮城県伊具郡筆甫村 橋浦泰雄

栃木県安蘇郡野上村 倉田一郎

新潟県東蒲原郡東川村 最上孝敬

愛知県北設楽郡振草村 瀬川清子 松岡かつみ

鳥取県東伯郡小鹿村 山口貞雄

島根県仁多郡八川村 杉浦健一

佐賀県東松浦郡厳木村 橋浦泰雄

長崎県南松浦郡久賀島村 瀬川清子

・記載はされているがあまり詳しくはないもの

岐阜県揖斐郡徳山村 桜田勝徳

滋賀県愛知郡東小椋村 関敬吾

大阪府泉南郡西葛城村 織戸建造

・全く記述がないのもの

静岡県賀茂郡中川村 佐々木彦一郎

大阪府泉南郡東信達村 山口康雄

こうしてみると、質問項目が入ったことによって当然ではあるが、それぞれが忌みの過程や内容など何らかの葬儀慣習について記述しており、二年目にして山村調査で、葬制自体を調査するようになったことが

わかる。逆をいえば、調査当初の段階では、儀礼などの葬制自体は意図されていなかったことがうかがえる。よって調査者は基本的には葬制の回答を収集することを必須とは捉えておらず、昭和九年の段階では、調査者の任意で情報が付加されていたことがわかる。しかし二年目の昭和一〇年の調査では、上記のように最上孝敬や瀬川清子など詳細に報告する調査者が増えていった。

③ 昭和二年の調査

こうして一一年の調査になると、ほぼ全員が調査項目を記すようになるとともに、質問が詳細になり、忌みの問題と食べ物との関係、葬儀の役割、また葬儀後の忌明けの過程など、調査者がある程度共通の事項を収集するようになってきている。これは調査項目として調査者の間で共有されてきた証左とも考えられる。

五 山村調査の中間報告と最終報告

山村調査はその中間報告として、一九三四年の調査が終わった一九三五年三月に『山村生活調査第一回報告書』、二年目の調査を終えた一九三五年三月に『山村調査報告第二回報告書』が発行された。『第一回報告書』で、柳田は調査目的を「村が一個の有機体として命長く生きてきた生理を明らかにしようというに在った」として、調査における「顕著な事項」について問題提起をしたものであった。〔柳田 一九八四（一九三五）一〕。

『第一回報告書』では、葬制に関する報告はないが、『第二回報告』では、大間知篤三によって「両墓制の資料」と題する報告がなされている〔大間知 一九八四（一九三五）〕。これは民俗研究において、以後大きな課題として取り上げられたいわゆる両墓制についての報告であり、大間知が研究史上はじめて埋葬地と石塔建立地の異なる墓制について「両墓制」と称した報告であった〔新谷 一九九一 一三〕。こうした大間知の葬

制に関する関心は墓制だけでなく、葬送儀礼など葬制に関する事項も最も充実した調査をしていることは前に述べたとおりであり、大間知の積極的な姿勢がここからもうかがえるのであった。

さらに山村調査の最終的、総合的な報告書として『山村生活の研究』（柳田国男編）が一九三八年に刊行される。上記の二冊の報告書が、それぞれ顕著な事項として特徴的な課題を取り上げたのに対し、『山村生活の研究』は、採集手帖の一〇〇項目を順番に六五課題にまとめて報告されている。調査をした同人達が一定のまとまり毎に課題を担当しており、杉浦健一によって、四〇「家屋敷の出入口」、四一「葬送儀式」、四二「死後の供養」、四三「先祖祭」、四四「同族神」、四五「屋敷神」と報告されている（柳田編 一九七五（一九三八）三五五―三八五）。ここでは、ほぼ葬送儀式から先祖祭までが葬制に関する項目である。

なかでも四一の葬送儀式は、質問項目では一九三五年から入った忌中行事についての質問に対応したものである。葬送儀式の報告は、(1) 葬式と村、(2) 葬式と食物、(3) 忌みあけという節に分かれており、(1) 葬式と村は、葬式組の構造と棺担ぎ、墓掘りなどその担う作業についてまとめられ、(2) 葬式と食物は、死者への供物、忌みのかかる親族の別火や忌明けの食事などを分析し、(3) 忌みあけは、忌明けの期間とその儀礼について論じられている。四二死後の供養は、盆の仏迎えの場所についての整理とそれに伴う儀礼、さらに年回の年限と弔い上げの儀礼についての報告である。これによって葬儀後の祖霊化の過程を分析している。さらに四三の先祖祭は、先祖観について、夢や託宣などの質問に基づいた分析である。

以上、四一の葬送儀式は、一九三四年の調査当初にはこれに関する質問項目がなく、昭和一〇年の調査から挿入された質問によって構成されていることから、すでに確認したように調査開始時点では葬儀から忌明けまでの葬制の調査は想定されておらず、調査過程において課題として

取り上げられてことが、この点からも明らかになった。つまり、最終的な報告として、葬送儀式が入ったことで、完全に葬制が山村調査に組み込まれたことがわかる。

六 海村調査における葬制と位置づけ

こうした山村調査における調査課題の変化は、その後に行われた海村調査においてどのように引き継がれたのであろうか。海村調査は「離島及び沿海諸村における郷党生活の調査」といい、一九三七年五月から開始されたが、日中戦争が次第に激化していったため、日本学術振興会の補助が二年目で打ち切られ、一九三九年四月までの三〇ヶ所の調査をもって終了した（柳田編 一九七五（一九四九）四三五）。この場合も山村調査と同様『沿海地方様採集手帳』をつくり調査に当たった。

調査項目は一〇〇項目を選定し、一番は村の起りで一〇〇番は仕合わせな家と山村調査の形態を踏襲している。海村に合わせた項目もあるが、基本的には共有する部分もかなりあり、引き継いでいるものも多い。

中間の項目で、四四嫁入・初婿入、四五遠方縁組、四六産屋・産の忌、四七初宮詣。幼児葬送、四八子供組、四九主婦権・女の私財、五〇年祝、五一同齡習俗、五二枕飯・別飯・香典、五三死忌、五四墓の種類、五五先祖祭り、五六小屋・屋敷神となっている。そこで葬制に関する質問項目を見てみたい。

五一 誕生・婚姻・年祝・葬式等には同齡者間に何か関わりがあるか。すか。

同齡者故に、祝ひや弔ひに参加せぬといふやうなことはあるか。
同齡者の死を聞いて、耳塞ぎ等といふことをしないか。

五二 死亡直後に炊く飯に関する作法。その始末。別れ飯を食べる範囲。

一般村人も葬家で飲食するか。埋葬役や湯灌役は特別の饗応を受けるか。

葬儀において村人の手伝ふこと。香典は親戚と一般とでどふ違ふか。

五三 忌中の行事。忌がかりの者のつゝしむべき事は何でせうか。

火を別にするか。妻や嫁にも忌がかかるか。嫁の実家の不幸の場合。

忌晴れの順序は血縁の親疎によるか。忌晴れの行事。

五四 以前の埋葬地。墓石を建てる場所や時機に関して承りたい。

旅先の死者、水死人等の墓は何所に築くか。

最終年回は何時か。その時に位牌や墓はどうするか。

五五 先祖の祀りやうが足らぬと心づくのは、どんな場合でせうか。

巫女や夢による以外、どんな徴候で知り、さうした場合にはどうして祀るか。

家屋敷などを買った者は、前の持主のために祭を時々するか。

海村調査では、まず五一は同齡感覚の質問から、葬制関連に移っていく。そして五二は食物と忌みの関係であり、そこに村と親族との相互関係についての質問も加味されており、山村調査の一九三六年の質問項目でも見られたものである。五三は忌中の行事としてとくに忌みのかかる範囲と忌明けについての質問であり、婚入者と実家との関係を聞いている。五四は墓制と死後の供養を合わせた質問であり、墓の場所を問うことで両墓制の質問にも対応している。五四は先祖の観念や屋敷先祖の質問である。こうしてみると、ほぼ葬儀の過程に合わせて調査を進めていく現行の葬制調査に近づいている。

一方で、山村調査では葬制の質問の元となった家の出入り口について、五八で「家の出入口の使用法には、どんな仕来りがありますか。正月に松を飾り、盆に仏を迎える入口、嫁の入口、棺の出口。其他土間口から出入りしないのは、どんな人でせうか。」とあり、かつてそれぞれ別

の項目として四項目に分かれていた部分が一つとなっている。つまり、海村調査は人生儀礼の質問項目として確立していたのである。

さらに海村調査の報告書として『海村生活の研究』（柳田国男 一九七五（一九四九））が刊行されているが、ここでは、一〇成年式、一一若者組・娘組、一二婚姻、一三葬制と人の一生の順に報告されている。一三葬制は牧田茂によって報告され、一葬式と食物、二忌中の習俗、三墓地と年忌、四流れ仏と、ほぼ質問項目にそって論じられており（牧田 一九七五（一九四九） 二五一～二七二）、最後の四流れ仏のみは海村らしい考察が加わっている。こうして葬制が調査の対象として、村落調査のなかで捉えられ、人生儀礼の一環として位置づけられるようになったことがうかがえよう。

七 人生儀礼と葬制の連関の醸成

山村調査では、当初意図されていなかった葬制の調査や人生儀礼における葬制という位置づけについては、調査を継続する過程で次第に醸成され、挿入されていたことが、質問項目の変化や調査者の採集手帖から明らかになった。それはまさにこの時期に、民俗学の資料蓄積が図られており、語彙集の刊行とも密接に関係があるろう。

民俗学の資料としては大正期の『郷土研究』（一九一三年～一九一七）など民俗関連雑誌や各地方の郡誌、町誌、村誌などもあるが、最もまとまったかたちでの大きな資料報告は、『旅と伝説』における特集であろう。『旅と伝説』（『三元社』）の特集企画によって実質的な資料集成の素材となっていた。一九三三年の六年新年号の「婚姻習俗特集」、また六年七月号の「誕生と葬礼特集」によって、ほぼ全国各地の産育、結婚、葬制の民俗資料が蓄積されていた。ただし、『旅と伝説』の報告では、必ずしも柳田の方法論である語彙を中心としたものではなく、その報告のレベルもさまざまであった。

こうした資料の蓄積の上で語彙集が刊行されていく。まず一九三五年『産育習俗語彙』（柳田国男）が刊行されるとともに、『民間伝承』二号では、橋浦泰雄によって「産育習俗語彙採集要項」が掲載された。また婚姻習俗に関しては、大間知篤三によって一九三六年『民間伝承』五号に「婚姻習俗採集項目（一）」、六号に「婚姻習俗採集項目（二）」が掲載され、翌一九三七年三月『婚姻習俗語彙』が柳田国男・大間知篤三の共著として刊行される。さらに一九三六年六月には橋浦泰雄により「葬制資料採集要項」が示され、翌一九三七年九月『葬送習俗語彙』が刊行される。こうして語彙集が、葬制をはじめそれぞれ人生儀礼に関わる産育、婚姻とともにほぼ連続して刊行されていくことで、その研究課題の親近性を見ることができるといえる。

この背景を考えると、一九三五年七月三十一日から八月六日にかけて、日本青年館で開催された日本民俗学講習会において、大間知篤三は「冠婚葬祭の話」として報告していることも大きな要因になったと考えられる。大間知は、「人の一生をおくるに幾つかの段階を通過しなければならぬが、そのうち最も重要であったのが一般的に言って、誕生、成年、婚姻、死亡の四段階である。」とし、「我々の祖先達が、かうした諸段階を如何に考へ、それに如何に処して来たかは、主として将来民俗学によつて解決していかなければならない問題であろう。と言ふのが言ひ過ぎなら、少なくとも民俗学はそれ等の解明に最も重大な寄与をなすべき科学の一つである」といふように、人生儀礼の研究の重要性を宣言している（大間知 一九三五 一九七）。そして誕生、成人、結婚とそれぞれ民俗学的な課題を述べており、葬制に関しては、臨終、枕飯、葬儀の助力、死の通知、死の忌みとその範囲、忌明け、盆の供養、弔い上げなど葬儀の過程を含めて葬制全般を捉えるだけでなく、両墓制を含めた課題をも取り上げている。

こうしてみると大間知篤三は当時の採集手帖を含め、かなり積極的に

人生儀礼については関心を持っていたことがわかる。つまり大間知をはじめとして研究所の同人達の中で、山村調査の過程において、次第に人生儀礼としての研究課題が共有化されていったものとおもわれる。そして海村調査以降は人生儀礼の一環として葬制が位置づけられ、民俗学の研究課題としてより研究が蓄積していくこととなった。⁶⁾

【謝辞】

成城大学民俗学研究所所長の松崎憲三先生をはじめ、閲覧室の林洋平氏ほか研究所のみなさまには『郷土生活研究採集手帖』の閲覧に際し大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

註

- (1) 『日本民俗大辞典』では、葬制は死の発生から死体処理までの過程を把握する用語としているが（青木 一九九〇 九七二）。ここでは、より広い意味において、人の死をめぐる儀礼や諸習俗の総称とする（内堀 一九八七 四二九～四三〇）。
- (2) 民俗学の葬制研究の展開については、山田（二〇〇七、一五～二八）を参照された。
- (3) これは先祖祭祀の質問項目が、位牌分けや分牌祭祀、祖名継承に関する質問であり（上野他編 一九八七 二五一）、当時の調査研究の進行によって増加したものと思われる。
- (4) これは後でも触れる『葬送習俗語彙』（柳田 一九三七）の目次を意識しているものと考えられる。ただし、『葬送習俗語彙』では「喪の始め」が一番であり「葬式の総名」は二番となっている。ただし、その前に示された「葬制資料採集要項」（橋浦 一九三六）では総名が一番になっている。
- (5) 山村調査の目的やその意義については、田中（一九八五）や矢野（一九九二）の考察がある。
- (6) 柳田自身、この山村調査の頃までの葬制、墓制に関連するまとまった論考は、「葬制の沿革について」（一九二九）と「生と死と食物」（一九三三）であり、「葬制の沿革について」は、墓制と葬法の変遷を通しての靈魂観の問題についてであり、また「生と死と食物」は、食物と忌みの問題である。柳田は臨終から葬儀、忌明けといった葬儀の過程を通しての葬制全般については、『葬送習俗語彙』を刊行しているものの、それほど関心は高くなかったのではないだろうか。この点につ

いては今後の課題としたい。

参考文献

- 青木 俊也 一九九九 『葬制』『日本民俗大辞典』 福田アジオ他編 吉川弘文館
- 岩倉 市郎 一九七三(一九三五) 『喜界島生活調査要目』『日本常民生活資料集成』 第二四巻、日本常民文化研究所編、三一書房
- 岩田 重則 一九九八 『日本民俗学の歴史と展開』『講座日本の民俗学』一民俗学の方法、福田アジオ・小松和彦編、雄山閣出版
- 内堀 基光 一九八七 『葬制』『文化人類学事典』 石川栄吉他編 弘文堂
- 上野 和男・高桑 守史・福田アジオ・宮田 登編 一九七四 『民俗調査ハンドブック』 吉川弘文館
- 上野 和男・高桑 守史・福田アジオ・宮田 登編 一九八七 『民俗調査ハンドブック』 新版 吉川弘文館
- 大間知篤三 一九三六 a 『婚姻習俗採集項目(一)』『民間伝承』 五号
- 大間知篤三 一九三六 b 『婚姻習俗採集項目(二)』『民間伝承』 六号
- 大間知篤三 一九八四(一九三六) 『両墓制の資料』『山村生活調査第二回報告書』『山村海村民俗の研究』 比嘉春潮他編、名著出版
- 大間知篤三 一九三五 『冠婚葬祭の話』『日本民俗学研究』 柳田国男編 岩波書店
- 新谷 尚紀 一九九一 『両墓制と他界観』 吉川弘文館
- 田中 宣一 一九八五 『山村調査』の意義『成城文芸』 一〇九号
- 橋浦 泰雄 一九三五 『産育習俗語彙採集要項』『民間伝承』 二号
- 橋浦 泰雄 一九三六 『葬制資料採集要項』『民間伝承』 一〇号
- 比嘉 春潮・大間知篤三・柳田 国男・守 随一編 一九八四 『山村海村民俗の研究』 名著出版
- 福田アジオ 一九八四 『解説』『山村調査』と『海村調査』――『山村海村民俗の研究』 比嘉春潮・大間知篤三・柳田国男・守随一編、名著出版
- 文化庁編 一九六五 『民俗資料調査収集の手びき』 第一法規出版
- 最上 孝敬 一九八〇 『詣り墓』 名著出版
- 最上 孝敬 一九八四 『靈魂の行方』 名著出版
- 柳田 国男 一九二九 『葬制の沿革について』『人類学雑誌』 四四巻六号
- 柳田 国男 一九三三 『生と死と食物』『旅と伝説』 六年七月号
- 柳田 国男 一九三五 『産育習俗語彙』 民間伝承の会
- 柳田 国男・大間知篤三 一九三六 『婚姻習俗語彙』 民間伝承の会
- 柳田 国男 一九三七 『葬送習俗語彙』 民間伝承の会
- 柳田 国男 一九八〇 『民間伝承論』 伝統と現代社

- 柳田 国男 一九八四(一九三五) 『採集事業の一画期』『山村生活調査第一回報告書』『山村海村民俗の研究』 比嘉春潮他編、名著出版
- 柳田 国男編 一九七五(一九三八) 『山村生活の研究』 復刻版 国書刊行会
- 柳田 国男編 一九七五(一九四九) 『海村生活の研究』 復刻版 国書刊行会
- 柳田 国男・関 敬吾編 一九四二 『日本民俗学入門』 改造社
- 柳田 国男・関 敬吾編 一九八二 『日本民俗学入門』 新版 名著出版
- 矢野 敬一 一九九二 『山村調査』の学史的再検討『日本民俗学』 一九一号
- 山田 慎也 二〇〇七 『現代日本の死と葬儀』 東京大学出版会

(国立歴史民俗博物館研究部)
(二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了)